

は一面に二葉の緑が見え出した、孟子の所謂苗を助けたいと云ふやうな心が起る、葵の二葉も露ほどの小さく、孔雀草の二葉は赤味がかつて居る、金魚草も出た、千鳥草も出た、金蓮花の苗は一本早や一寸ばかり伸びた、一番多いのが牡丹罌粟、少いのが見草、全く出ないのは翠菊と黄紅咲分けの雞頭、斯う日々二葉の花の苗を見て居る楽しさと云つたら、刺繡の薔薇を縫ふて居る細君もゴムの風船玉を玩弄んで居る小供も窺ひ知らぬ楽しさである。此庭に天を摩する松の大木が一本ある、毎朝々々梢に鳶が止つて、首のない鮒や、鼠の臍を此花鳥の上へ落しよる、此間の如きは猫の頭らしいものを落しよつた氣持悪さ、此花鳥を保護する策として一つ鳶を捕てやらうかと思ひ付いた、これは同人古愚子の知恵を借つて、小さな壺へ金魚を入れて松の下へ置いて行く、

スルと松の梢から鳶が壺の金魚を見付けて獲りに下りる、壺へ這入る時はスウと羽根をすぼめて這入るが、壺の中を出る時は壺の中で羽根を擴げて居るからバタ／＼と能う出ない、ソコを引捕へて其鳶を動物園へでも寄付しやうと云ふ名案ぢやが、未だ實行はして居ない、いづれ獲れたら寫生文の好材料である。
物落す鳶獲る沙汰や花の苗

四、薺の日

正月薺の日は僕の家庭も最の記念すべき吉日であつた、それは僕に取りては玉よりも嬉しい長男を得たからで、これは其の日記の一節である。

お腹が痛むとして呼び覺されたのは丁度枕時計が午前四時を示す

頃で、此時は神佛よりも産婆が方だ、あたふた家紋の付いた古提灯を點すなどして草庵を走り出た、大空には無数の星が夜の梅のやうにキラリ／＼と輝いて、町へ出ると警邏の巡査にも出逢はぬ淋しさだ、産婆の家を探すと葬の駕屋の真向ひで、偶然とは云へ人生の涙と笑を説明して居る心地がする、産婆はゆつくり褌衣を着替えなどして來た。

産婆を一臺出逢ふた辻車に乗せて先へ走らせた、男か女か安産か難産か、嬉しいやうな恐しいやうな心地がする、ナニ人力で如何ともする事の出來ないものだ、と諦めてもスグ氣になる、途中一軒に聲を懸けて置いて草庵へ戻ると未だ／＼このこと、ソレ産湯を沸せソレ蕎粥を炊けとそれは／＼忙しいこと、未だ暇が取れませう、と斯る中にも火鉢を擁してコクリ／＼坐睡を始むる産婆の

膽玉には驚いた、聽て座敷の障紙がほの／＼と白み出した、お腹が一頻り／＼痛みまざるげな、建仁寺の森に明烏が啼き出した、未だ産聲が聽えぬ、早や東山に茜が射し初めたので、僕と産婆と、産婦が宵の程に囁して置いた蕎粥を祝ふ、郵便——と抛込んで行つた、凧の繪を描いた年賀のはがきだ、縁喜がイ、男兒が産まれる吉兆だナと思ふ、母の許より安産の守護にとて鹽竈大明神の掛軸を持參して呉れた、掛けて見ると御神影は二體で、男尊一體は鍋を冠り女尊一體は釜を冠つて、其上に七難即滅七福即生とある、鍋釜を冠る神様とはなか／＼俳味がある。

一人二人女達が手傳ひに見える、産婦の傍に夫は居らぬものだとのこと、成程居てもこれほど手持無沙汰のことはない、産室を窺はぬのは神代の遺風など、理窟を付けて草庵を出る、默雷老師

を訪ねて茶話をする、佛説には父母の血を紅白の芍薬に譬へてある小兒は其芍薬の花から産れるのである、出産は天地間の一大不思議であるとの話も出る一時間ほど経て草庵へ歸ると、門口から呱呱の聲が聞えて、庭の梅の下に産湯の盥が据ゑてある、手傳ひの女達が皆々聲を揃えて御安産でお芽出たうムりますと祝詞を述べる、見ると赤いくく小さいくく男兒だ、鼻と眼が僕に肖て居るとのことだ、ア、我志未だ達せず早く已に長男を得た、此嬰兒に對しても忸怩たらざるを得ないのである。

長女は奈良で孕んだので彼の左近の橘の子に因んで橘子と命名したが、此長男は御題にあやかかりて松男と命名しやうなどと相談をする、人生小兒の父母となつて初めて家庭の眞趣を解するので、新婚一二年の家庭の如きは花はあり、實はないのであると云ひた

くなる。

嬰兒を得て初めて人間の不思議な動物なのを知る、嬰兒は我兒に違ひない、されど一面天の兒であるとの感が起る、即ち父母は人類と國家と祖先の爲に此嬰兒を養育すべきもので、父母は決して父母自身の爲に我子に至孝を強うべき權利はない、生涯我子の爲に苦むを喜びとせねばならぬなどと思ふ、併しこれは唯だ父母としての感想で、人の子として父母に至孝なるべきは勿論である、嬉しまぐれ、色々の感想を花梓を巻いた日誌に書い付けて、男の子齋囃す中に生れけり

四、なかぬ人形

僕にことし四才の小娘がある、なか／＼好う舌が廻る、早や此

頃は姉様氣取りになつて人形ちやん買うてチ〜とせがむで居た處へ、齊正月の朝、其弟に當る嬰兒がホギヤア〜と生れたので、ア、小さい人形ちやんや〜と差覗いて頬舐すして喜んで居た、しかし母親が嬰兒の添乳や襦袢がへに手を取られて、其後は一向姉娘の面倒を見て呉れぬやうになつたので、時々執拗て此人形ちやん抛つておしまいナ、モット泣かぬ人形ちやん買うてナ、など言出すかと思へば、抱こ〜と蒼蠅いほど母親の懐中なる嬰兒に纏ひ付く。

ソレ泣いたとては此春寒に炬燵からしば〜抱き上げた〜めか、此人形ちやんが不圖インフルエンザに罹つた、早うお醫者に診せよと、紫の肩掛の内あた〜かく母親が抱いて、僕も姉娘も付添ふと云ふ總が〜りであたふたお醫者へ連れられた行つた、お醫者は聽診

器を人形ちやんの胸へ當てしばらく診察して居たが、聽て絶望！と云ふむづかしい顔付をして、これはなか〜危篤の症状です、餘り抱いて門を歩いては不可ません、早くお宅へ歸つて十分あた〜めてお上げなさい、勿論天壽と病氣は別です、看護次第で助からぬとも斷言出来ませんが御注意なさい、と云ふ、青天の霹靂とは此の事だ、たい假初めの涕垂れ風邪と思つて居たに早や危篤の症状かと僕よりも母親がハラ〜と熱涙を人形ちやんの顔へ溢す、僕は或は誤診ぢやないかと疑ふ、姉娘は雀はチユ〜鴉はカアカアと啼いて居ると唱歌を唄つ居る、鴉はカア〜が縁喜が悪いと氣になる、人間は愚なものだ。

サア一時間ほど前まで春風靄々の家庭も俄かに蕭殺の氣が満々だ、見舞人が出て来る、お可愛さうに若い夫婦はコンナ事に氣が

付かぬで困る、モット早う病氣が解りさうなもの、手遅れぢやらう、など驚いて駐付けて来た嫁の姑が云ふ、薬を服ます受け付け
 たとして喜ぶ、乳を呑まぬとて心配する、僕は湯婆と炬燵とで温め
 て遣れ、醫者が云ふて居た、室内の温度を六十度位にせねば不可ん
 と喚く、人形ちゃんは静に沈睡するやうだ、母親は絶えずサアお
 乳お乳と揺起す、いかにも泣かぬ人形のやうになつた、午からお
 醫者が車を走らしで見舞うて呉れた、僕が送つて出ると小聲で而
 も力ある聲で御注意なさい！と云ふ、あゝ死の宣告だ、それにし
 ても餘りに儂ない、春の夜の夢よりも儂ない、何の爲に生れて來
 たのか、餘りに脆い、花の蕾よりも脆い、此親の愛の力が此の病
 を救ふことは出來ないか、天の一方より絶大の威力が此嬰兒の上
 に加はつて欲しい、天の靈藥が庭の樹に降りかゝつて居ないか、

それにしても早く醫藥の効驗が現はれさうなものだ、と枕頭を去
 らず看護をする、ホギヤアと一聲泣いた、ヤレ嬉しい薬能が見え
 たのだ早くくと乳を呑まず、一口吸付いて再び沈睡に陥る、ア
 、鳥の跡に死なんとする其聲悲し、これが最後の泣聲であつた、
 父母への告別であつた、ア、僕の最愛の嬰兒は人生に在る僅かに
 三十日にして永眠したのだ、イヤ未だ呼吸がある、脈搏があるな
 ど、思ひ返す、思ひ返しても彼れは遂に泣かぬ人形となつて母親
 の腕に抱かれつゝ、静かに永眠せるのである、ア、寝顔に浮びし微
 笑の跡は今は何處へ消えたのであらうか。
 千代までと祈ればこそ松男と命名したのだ、誰れが今松露孩子
 との戒名と變ることを知らう、柩には僕と妻とが梅の花を入れて
 やつた、それは永眠の前日妻が襪を仕かへやる時、瓶に活けあ

りし梅花を眺めて居たとのことで、これ僕に似て俳句を詠む心があつたのであらうと思はれたからだ、ア、こんな人形ちゃんを此儘火葬にするのは惜しい慘酷だ、ミイラとしていつまでも保存して置きたかつた。

悔みに來た或友人曰く、ナニ病氣に罹つたりして脆くも死ぬやうな弱い嬰兒は惜しくないぢやないか、病氣しても醫者にかげず、スバルタ的に養育して而も健全な嬰兒でなけりや末頼母しくない、と、僕も此一語に勵まされてソウダと涙を揮つた、しかし妻は未だに想出しては泣いて居る。

惜まるゝ雛箱ほどの柩かな

六、出 産

僕は去年の正月而もめでたい齋の日の朝方に小さい男の兒を得た、乃ち齋の日は昔なら大宮人が小松を引いて遊ぶ日に當るのと勅題が丁度新年の松であつたので名を松男と命じて喜んで居た、處が其喜びは春の夜の夢よりも儂なく松男は僅かに一月此の世でホギヤア〜と啼いて居たばかり、遂に假初の病が重つて市松人形のやうな亡骸を雛箱のやうな柩の中に残して翌月の十日あまりに死んで仕舞うた、其の時僕はつくづく思つた、斯兒は何が故に此の世へ生れ落ちたのか、唯だホギヤア〜とのみ啼きに來たのか、さるにても餘りに脆き運命ならずや、抑も人間に定まりし天職といふものありやなしや、あはれ斯の兒の天職は唯だホギヤア

の啼聲にて盡くされしにや、と茫然として雛よりも美しかりし亡骸を如何にしても茶毘の焰の裡に送るに忍びなかつた。斯くて桃の花も残りなう散り失せ池の菖蒲紫の蕾の筆を抽んせし頃、又もや僕の妻は懐妊した、菖蒲の紫の筆を見て懐妊したのは貧文士の兒としては誠に吉兆である、妻は先に逝きし兒の再び宿りしものならんと信じて居る、此の信仰愚に似たれども亦憐れで一度愛兒を失ひし世の母は、皆なさこそと察せらるゝであらう。處が不思議や先に逝きし兒の出産せし齊正月、丁度ことしの齊正月の宵の程より又もや僕の妻は産氣付いた、未だ東西も知らぬ此の名古屋の旅の空、僕は努めて氣海を丹田に沈めやうとしても、妻を懐胎せしめし夫の人情として、いかに周章ざらんと欲するも得なかつた。

夜半産婆の家に行ったのは僕だ、此の時は産婆が神佛よりも尊く思はれる、産婆はスグに参ります、ドンナお鹽梅ですかと云ふ、却々落着いたものだ、最う産れそうですと答へて走せ歸る間も心配だ、コンナ事なら最初から妻を持たぬがイ、と心で心が叱り付ける。

妻は頻りに産付く、此の時堂々たる大丈夫も如何とも詮術がない、又家を走せ出やうとすると若い産婆さん特にさんの敬稱を奉るは提灯を點して夜半の霜を踏んで来て呉れた、見ると色の白い束髪に結うた新派の産婆さんだ、スグに白い消毒衣を着けて室に這入る、僕は一間の座敷に襖を隔て、安産を祈る、妻が唸ると僕も唸る妻が氣張ると僕も氣張る、こゝ即ち那翁の所謂最後の五分間だ、辛抱が大事だと思つて居ると、どこやらでコカコツコと鶏

が歌ふ、ほのく〜と障紙が白むホギヤア〜と産聲が聽える、僕は飛び立つほど嬉しくなる。

サア盥に湯を取れと産婆さんが命令を下す、湯をとる、水を汲めと命令する、水を汲む、漸と用事を済まして産室を覗くと赤兒は産婆さんの手に抱かれて居る、妻は安らかに臥床して居る、母子共に健全だ、おめでとう男さんですよと産婆さんが云ふ、見ると先に逝つた兒と面影が似て居る、不思議だナと心竊かに思ふ。

赤兒はホヂヤア〜と啼く、初生の孩子還へて六識を具すや否や、急水上に毬子を打すなど、自問自答する、最う赤兒に氣を奪はれて産婆さんが神佛ぢやないやうに思ふ人間は勝手なものぢやと自ら驚く。

いよ〜赤兒に命名せねばならん、何と命名しやうかとは俳句

を考へるよりも六ヶ敷い問題だ、赤兒は猿に似て居る、ことしは猿歳である、こゝは尾張の國である、それでは豊太閤に私淑つて藤吉郎と命名しやう藤吉と云へば丁稚のやうぢやが藤吉郎と云へば口調が好うて男子らしい、と遂に藤吉郎と命名する、早や此の端午には豊太閤の大將人形が欲しいナと思ふ、我ながら親心は馬鹿なものぢやと思ひながらも馬鹿な事を考へるのがツマリ人情の尊い處ぢやと理窟を付ける、自祝一句。

僕の兒は太閤さんぢや猿の春

七、建仁寺の臘八

臘八とは釋迦が雪山で紫の明星を看取し、豁然大悟徹底せられたてふ日に相當するので、三千年以降の今も尙京の五山では十二

月の一日より七日の朝まで一山の雲衲居士等は長座不臥、いづれも心王を把握せんとてひたぶる工夫を凝す、僕も臘八の一夜建仁寺へ行つて禪堂に座つて見たが、彼の基督降誕の夜半にも荒野を照す紫の星が驢馬に乗り行く羅馬の博士達をベツレヘムへ導いて、馬槽の中に聖母と嬰兒に黄金没薬乳香を捧げつゝ禮拜せしめた事を想ひ浮べて、今宵の星も亦至亞細亞の光イヤ此大なる我を照す瑠璃光明であらうといと崇高な感が起つた。

菩提樹の落葉を踏んで専門道場の門を這入つた、道場では一切學者に足袋を穿くことを許さない、況んや首巻をや懐手をやで着倒れの京美人などなら一遍に風邪引きさうな寒さだ、僧舎の「照顧脚下」と木札を打つた臺所より上ると、こゝには幾十足となく靴おり下駄あり萬緑叢中紅一點の女下駄も揃えてある、其鼻緒が莖色

だといよゝ詩的だナと思ふ、暗い本堂の廻廊を傳ふて行くと其外れの階段に「聖侍」と記した行燈が點してある、草履を穿いて登を靜かに禪堂へ行く。

禪揚は満員で其人數雪山の羅漢よりも多いやうだ、但し女下駄の主人はこゝに入るを許されない、本堂側に女ばかりの一室がしつらへてあるので、禪堂は清淨潔白脂粉の氣微塵もない代りに、時に祇園あたりの三味線の音が手に取るやうに聞えて来る、端座して居ると外は月夜か、窓の障子にいつしか墨繪の如き枯木の影が映つて居る、イヤ枯木の影ばかりであるまい、居並ぶ雲衲居士の心頭にはドンナ繪が描かれて居るであらう、X光線でも欲しいナと思つて居ると、警策を捧持した影の如き僧二人が、行容肅々、たえず堂内を巡檢して雲衲の惰眠を覺醒する、其痛棒の數が夏季

は六つ、冬季は法衣の下着が厚いので八つの掟であるさうな、此痛棒のお鉢が僕等にも廻つて来るのではないかと思つたが、居士には一向喰はさないののでやれ〜と安心した。

これが僧堂の衛生法と云ふのであらう、足が痛くなる頃合を計つて拍子木が二つなるを合圖に、雲衲居士が一齊に禪榻より下り立つて盤冷き堂内をぐるり〜と數周する、又拍子木を合圖に結伽趺座をする、これに靜中動ありと云ふ趣きがある、暫くすると一老が右總參——と聲を懸ける、とバタ〜と右側の禪榻のが出て行く大方濟んだ時分に又同じく一老が顔を見せて左總參——と聲を懸けに來た、此時僕等も水涕を拭んで一室の溜りに行くトスグ總參が始まつて前側より順々に起て行く、後の鴉が先になると云ふやうな事はない、個々の參禪が濟む毎に廊下の突當りなる老

師の室でチンと鈴が鳴る、それと相應じて次の者が「斷再來」と記した木札の上に置いてある撞木を以て小さい鐘を二つカンカンと叩いて交る〜起て行くのだ、皆ドンナ事を言つたか此方まで聞えない、唯一人虎の如き聲を出して進め——と默雷老師に號令を懸けた居士の聲が一頻り四邊に響いたばかり、頓て僕の番になつて椽を傳ふて行くと臘梅を活けて達磨の像を掛けた室に獅子の眠れるが如き眼をして老師が端座して居られるので、僕も獅子兒の一吼を發して見た、見性が濟んで再び禪堂に座ると、所謂禪榻夜閑にして鐵よりも冷かである、達磨然と赤毛布を敷いた一居士が目立つ、焼餅を二つづゝ配られる、茶粥を饗應はれる、了つて元の枯木寒巖のやうな靜座に返ると、寂寞としてたい水涕、咳拂、警策を打つ響が冴え渡るのみで、紫の明星が輝く曉天も程近く、

寒氣いよ／＼骨に沁む時、突如と一老が走り行と叫んだ、言訖らぬ中禪榻の雲衲居士一齊に飛箭の如く堂外へ走り出した、僕は之を機會に自庵へ歸つて、今度は炬燵臥禪と洒落ながら、臘八とはなかく、寒いものだナと思ひつゝ、いつしか曉夢を結んだ、翌朝默雷老師の似された偈。

臘八滿願偶成

憶昔雪山成道人、彼何人矣我何人

曉天雲盡星如玉、一顆分光九十八

臘八接心が濟むと僧堂の煤掃、西の岡へ大根貫ひにも行かねばならぬと雲衲の語合へるなど、何たる禪寺の俳味の饒いことぞや。

無字關頌句

臘八に獅子兒初めて一吼かな

臘八や大千世界星ばかり
臘八や星を見たのは釋迦の臍
臘八や我がおのれ辨香す

八、德源寺の臘八

名古屋市東北の町外れ、稍市中の紅塵に遠ざかつた處に在る德源寺は昔から江湖道場として名高い臨濟宗の禪刹である、八日からは同僧堂の臘八接心で數十名の雲衲はいづれも勇猛精進一大事の工夫を凝らして居るのだ。

此の道場は原の白隱禪師の法孫峨山和尚の弟子で隱山卓洲と並び稱せられた卓洲和尚の開創だ、禪宗の系統から云ふと却却八釜しい道場である、彼の蘇山和尚など云ふ歴々もこゝで潜淵多年骨

を折られたので、實に名古屋のやうな俗地に捨て置くのは惜しい、靈山である。

如何にもこゝは蓬來靈山と呼ぶだけに毎曉毎曉水彩畫のやうな建中寺の鬱蒼たる森からかけてこゝの松林一帯——山門の風致を添うると後世の儀表たらしむべく裁ゑてある——上を今しも瞳々として東海の銀波を蹴つて出た旭の影が射す、それを打仰ぐ心地の好い事と云つたら不斷に草や木までも青青たる佳氣を吐いて居る。而して僧堂の富裕な事も今日では恐らく海内第一であらう、これは名古屋に熱心なる佛教信者が多く、常に外護依養を怠らぬからで、此の點に至ると名古屋人士は實に感心である、金と共に心を忘れぬのは美所である、古來美濃尾張は禪風の盛んな土地で名僧大徳を輩出して居るが、大いに由縁ありと思はれる、徳源はこ

れ井深、虎溪とともに京都の五山に對峙すべき三禪窟の一目下掛錫の僧鳳凰は四十有餘名に達して居るさうだ、それに喝雷棒雨日夜鉗鎚を加へて居られるのは碧松軒蘆山老師で老師の眼光は臘八になるといよく爛々たるものぢや、『世の中に恐しいもの二ツあり師家の眼玉に月末の鬼』とは能く云つた歌だ。

僕も建仁寺の默雷老師からの添書を付けられて此の徳源僧堂へ日々通參する事になつたので、社務の多忙な裡から時々忘れられぬやうに顔を出す、劈頭に碧松軒老師から頂戴した公案は『法華經曰深入禪定見十方佛』と云ふのだが、公案に由て骨さへ折れば權兵衛さんでも太郎兵衛さんでもスグ見性成佛出来るのだ、次に貰うたのは『何故此の手を手と云ふ乎』との一大難問題だ、サア此の手がぢや、我手何ぞ佛手に似たる我足何ぞ驢脚に似たるで、我々凡俗

には却々容易に透破出来ぬらしい。などい道々専念工夫を凝らしつゝ、行くと僧堂の門前に石標が二本立つて居る、それに『此是選佛場、心空及第歸』と龍居士の偈が彫付けてある、及第歸ぢやない、いつも落第歸ぢやと可笑くなる、道場の立關には脚下照顧とあつてキチンと下駄が鴛鴦の沓のやうに穿き揃えてある、副司寮には元妙心寺に居たと云ふ機鋒のありさうな坊さんが居られる、向うの聯に『客來何説京城事、又費山中半日閑』と書いてあるのが嬉しい、卓洲和尚の『香積』、本堂に掛けてある禪徒の龜鑑などを讀んで行くと、禪堂の入口に白隱禪師の『爪牙窟』と大書せられた額がある、爪牙窟とは一讀しても慄然とする、鳩鳥身塗毒鼓のやうな文句だ、堂内には今しも數十人の雪襦が榻の上に端然として三昧に入つて居る、磬の上を警策を捧持した僧

二人が凜々しく結束して肅々と歩を移しつゝ、監視して居る、大きな咳拂ひ一つする者もない、堂内から見渡すと早や初霞の棚曳く森越しに建中寺の葦が見える、忽ちチーンと鈴が鳴る、雲袈は總立ちになつて榻を下りる、堂内をぐるりとと走せ廻る、襪を着けずに皆赤跣のまゝであるのだ、記者もしばらく其の走り行の御仲間入りをする、最う出社の時間が迫らぬか〜と氣になつて屢々懐中時計を出して見る、其の忙しないこと恰で汽車に乗つて座禪をして居るやうなものだ。

午前九時に喚鐘の出る筈だったが、今日は午後二時にならねば喚鐘が出ないとの事で僕だけは一寸密參を済まして歸宅しやうと副司寮の火鉢の前に座つてしているとスーと障紙を開けて一人の大姉がお辭儀する、副司寮の坊さんに今日から此のお方が見えますよ

ろしうと云ふ、見ると束髪に結うたうら若い婦人で、これは愛知育
 兒院の保姆長、一生未婚で通さうと云ふ變り者ぢやと坊さんが説
 明して呉られる。

市中には犬や猫や人間が雜然として居る已に正午前だ。

九、俳句説法

△近來中央の俳壇では通俗なものを美化さすてふことが一の趨勢
 となつて居るさうだが通俗なものを美化さすと云ふことは餘程手
 腕を要する仕事で、面白い新研究の方面である。

おこし繪や親の大工の子煩惱 虚子

荷車の片輪はづすや蚊喰鳥 句佛

などは即ち通俗なものを美化さした作例である。

△大體俳句其物が通俗なものであるから、俳人はあらゆる社會の
 萬象を句にするてふ覺悟を要す、此點に於て僕は人事に重きを置
 く、成るべく此方面の句を作つて見たいと思ふ。

△會て花の本芹舎などが矢立と云ふ題で句作をしたのを、或近眼
 者流などは之を俗極る題として排斥して居れど、旨味く美化し得
 さへすれば矢立でも算盤でも我家の俳諧である、いくら俳句でも
 社會に縁遠くなると其本領の幾部を失ふことあるのだ、僕は常に
 思ふて居る、新聞紙の七面種は人事俳句の好材料である、掏摸
 でも賭博でも萬引でも乃至小判發掘事件でも木屋町の高等賣笑で
 も凡て句種である。

△元祿時代の女流俳家は衣裳の模様を始め其風俗の細かい所まで
 を詠んで居る、これは女流の常として何より先づ身の廻りに氣の

付いた故と思はれる。イヤ時代の好尚が活達奢侈であつたからであらう。又江戸座の句を讀むと花廊其他の風俗が色彩までありくと眼に映つる。普通の風俗史では氣の付いて居ない細微な所までが解るやうに思ふ。それで明治の今日では是非社會人事の寫生句は勿論、其庇髮や角帽や燕尾服や電車やあらゆる風俗を美化さして。明治俳句史上に残して置きたい。

△明治廿七八年の新派勃興時代には、随分歴史を詠んだ句も見えたが、近來は一向歴史的の句を見當らぬ。名所を詠込んだ句さへ稀れくとなつた。名所と有職故實の句をよくするのは關西では四明翁ばかりであらう。

△京と奈良の名所を知らぬば古句の半ばを解することが出来ぬと故子規翁も申し置かれたやうだ。昔の名所今の名所、これは造化

翁が我々に遺せる國寶だから我々俳人たる者はセメて一句位は名句を吐いて置かぬと子孫に申譯がない。

△歴史や地理の句は日本ばかりに限らぬ、廣く世界の歴史と地理を句材にすれば明治時代の産物としてなか／＼面白い句が出来るに違ひない。現に碧梧桐子が全國行脚に依つてどれだけ明治俳句史の光彩になるか知れぬ如く、是非世界行脚の俳人も遠からず現はれて貰ひたいものである。而して其紀行を天下に公表すれば、讀者社會の之を歓迎することは決してマルコポーロの紀行の比ではあるまい。

△我が日本の歴史にしても、未だ／＼十分句材を取る餘地があらうかと信せられる。此程栖風畫伯が神代史を畫にして見たいと話されたが、俳人も亦神代史を研究すると共に其雄大なる空想美を

把捉して置く必要がある。

△僕は世の俳人がそれ／＼の特長を自覺してそれを十分に發揮せんことを勸告したのである。猿の人真似は不見識も亦甚しいから、莖は莖、牡丹は牡丹と各一家の特色を助長して貰ひたいので、彼の無暗に流行にかぶれて其特長までを没却するのは却て俳壇の爲に弔すべき現象である。流行を逐ふも可なり、されど各自不易の名句も残して欲しい。

△主觀的の句は稍もずると禪の公案的に解つて解らぬやうになる、解つて解らぬやうな句に却つて何とも云へぬ興味を感ずる事もあ

雷に噓付く虎や秋の風 黙 雷

十、俳 偈

○夏中偶吟

短夜の枕頭へ召す料紙かな
座蒲團を敷くや小僧も木魚も
開き初むぼうたんに飲む新茶哉
榻に吹く晝松風や捨團扇
人の飲む新酒に咽喉を鳴すかな
前垂の麩の粉を拂ひけり
じやあゝと立小便や夏の川
初拾羽織の紐を結びけり
夫婦して押へたり馬ほどの蚤

けふ頭痛けふ腹痛や五月雨
こそぐられても寝入花時鳥
花見喧嘩瓢を頭となぐりけり
この春に我子死なしぬ涅槃像
此風景鶏鳴狗吠明易き

○制問拈得

出代や故郷の人と立話
紙で捲く紅さし指や煤拂
づぶ濡れて裸となるや水掛合
千尺の松の大樹や簞
秃筆を焼捨にけり水仙花
犬の足踏めば嚙付く五月闇

御馳走の酢揉匂ふや夏座敷
寒彈す憎い糞子を呵りけり
大川を渡れば颯と青嵐
炭といへば炭團を持って來りけり
長官を突倒すそれも年忘
煤拂や賣扇庵の古扇
初雪や赤跣で歩く乞食あり
珠數も入れ栗も入れたる袋かな
色好む下男なぐるや胼の手で
雪黒しと見れば鴉の飛にけり
初午や寝牛天神角力取
名月にちらりと動く兔かな

柿二つ漉い一つを踏み潰す

○臘 八

臘八の異様に鳴る陀羅尼かな
臘八や一念不起の白蓮華
臘八に月夜鶉の聲奇なり
臘八や床に牡丹花睡猫圖
臘八や九重錦と五逆雷
熱いく臘八粥を啜りけり
臘八は寒し塗毒鼓鳩鳥身
臘八や爛々として樂迦羅眼

參 禪 餘 錄 終

明治四十一年三月二日印刷
明治四十一年三月十三日發行

譯機與附 (定價金四十錢)

編輯者 大釜彌三郎

發行者 山中孝之助

印刷者 守岡功

印刷所 株式會社 國光社

發行 上宮教會 出版部 山中孝之助

發賣所 井列堂

關西發賣所 會社 積文社

大阪市東區北久太郎町四丁目



目書行發堂洌井

文學博士 村上專精先生序 大内青精先生跋
加藤咄堂先生著
○補死生觀 全一冊 定價金四十錢
死生は人生の一大事實にして千古未解の問題

文學博士 前田憲雲師序
加藤咄堂先生著
○運命觀 全一冊 定價金卅五錢
人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せ

文學博士 井上圓了師序 島地默雷師跋
加藤咄堂先生著
○女性觀 全一冊 定價金卅五錢
美神の推化として崇拜すべきか惡魔の化身と

加藤咄堂先生著
○心的英雄史 全一冊 定價金五十錢
本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と

加藤咄堂先生著
○佛敎講話 全一冊 定價金四十錢
本書は佛敎の組織的佛敎境野氏の歴史

加藤咄堂先生著
○修道講話 全一冊 定價金四十錢
道を行ふは人生の本務にして道は修むるは

加藤咄堂先生著
○小説 光 全一冊 定價金五十錢
先生著書既に等身、しかも未だ筆を小説に

加藤咄堂先生著
○佛敎要義 全一冊
本巻は佛敎の要義を研究し、佛敎の歴史を

久米邦武先生著

○上宮太子實錄

全一冊 洋裝裝本

本書は高麗遠征を以て史界獨歩の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇抜なる見解とを以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實態を詳叙し、荒唐不稽なる従来の傳説を擊破し前人未發新見地を以て其面目を發揮し、太子を心中として政治、宗教、文學美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね其の特色を説きて剩す所なく。論は東西に及び、歴は今古を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書なり。與國の氣運今や然して人は皆な我が文明の眞相を知らしむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

定價金七十五錢 郵税金八錢

○宗教と哲學

全一冊

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此等に因りて始めて元氣の回復を求め得るなり。

定價金四十五錢 郵税金八錢

新公論社編 ○附錄學生消夏法

全二冊

該書は坪内逍遙、柳橋潤子、幸田露伴、村上春樹、三輪田實、佐治實然、山崎天来、小杉天外、山縣三郎、前田香、南條文雄、島田三郎、松村介石、渡邊一、戸川花、鈴木三郎、石黒忠、寺田水、中川謙次、中治六、坂本盛徳、加納久宜、古川流、田次郎、加藤咄堂、増野洋、中島徳、下村大、大塚、現、代、男、女、學、生、の、短、所、を、補、ふ、き、方、法、を、示、さ、れ、た、る、の、な、り。

定價金廿錢 郵税金二錢

○阿彌陀佛

全一冊 定價金卅五錢 郵税金四錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛の根本問題也ケラス博士の彩筆を揮ひ給ふ小説的結構を以て通俗にこれ解を試む宜なり其の結構を讀むに好評噴々たることを弊堂頃者十年來士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈佛の有無に感ひ心の不安に悶ふる人のみこれを讀むべしと自はむや。

定價金卅五錢 郵税金四錢

文學博士 前田慈雲師著

○修養と研究

全一冊

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を閉き微を穿り濃厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研究に於ける佛敎原理上の大論文と條發に關する深厚なる談話とを集輯したるものなれば一度本書を讀みんが親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

定價金五拾錢 郵税金八錢

文學博士 前田慈雲師著

○蓮如上人

全一冊 定價金卅八錢 郵税金六錢

佛敎界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力敎眞宗の大成者たる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、溢屏の史眼とを以て、上人の時代、性格、敎養、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力敎の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。

定價金卅八錢 郵税金六錢

○修養錄

全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

濃厚篤實、而も道心堅固の間へある、南條博士の實際的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つと六、節を分つと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に悩める者、若くは樂しき生活を造らんと欲する者に速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

○禪榻茶話

全一冊 定價金五十錢 郵税金六錢

短編長語五十餘篇修養の要諦を説き信仰の妙味を談し學藝の精微を提げ古今の人物を評し箇々の話頭深厚の教訓と無限の興趣を感じし。

○修養錄

全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

濃厚篤實、而も道心堅固の間へある、南條博士の實際的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つと六、節を分つと二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に悩める者、若くは樂しき生活を造らんと欲する者に速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

井 列 堂 發 行 書 目

文學博士 南條文雄師著
○感想錄 全一冊 定價金四十錢
本書は博士平生の感想なるものにして或は古人の訓誡を示して後進を誘ふものにして或は身の感話あり偉人才能の逸話あり時に博士自ら因て教を垂れ時に武道を語り時に信仰を説くに加ふるに條々十則を以てす實に之を精神修養の好指針品性陶冶の良資料たり。

文學博士 南條文雄師著
○忘己錄 全一冊 定價金四拾錢
佛教の信仰は己れを忘れて佛陀の大慈悲に歸命するにあり本書は博士多年の靈的實踐に歸し他方宗教の眞髓を説述したる者なり行文平易にして所載懇篤面白く煩悶憂鬱を慰む思ひあり一讀よく煩悶憂鬱を慰む。

文學博士 南條文雄師著
○人道 全一冊 定價金十五錢
人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髄たる仁義五常の道より宗教の極致たる經典の所説とを對照し叮嚀懇切に人道の大旨を示されたるものにして博識切に人道的大旨を切の譬喩を以てし談話體に何人も加ふるに適切たる傳道的好施本なり。

アーサー・ロイド先生序
曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○怪傑マホメツト 全一冊
定價金五十錢 郵税金八錢
序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絶倒すべき者詩趣津々たる者枚舉に遑ならず本論には宗教家として、マホメツトが迫害受辱の中に隱忍黙耐する預言者的高風を叙し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を踏破する姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼神を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣り門の秘事に至る迄悉く詳記して深々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

曹洞宗管長 森田悟由禪師序
加藤咄堂、峰玄光兩先生共著
○禪觀錄 全一冊 定價金三十錢
禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を説き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀巻を捲く能はざらむ。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○禪學講話 全一冊 定價金四十錢
適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨髄を鍛練したるものば禪也。痛言快語以て人生の眞意を示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書「人生の謎」以下各章、明快の説、有種の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○禪の妙味 全一冊 定價金四十錢
上篇は精神澄靜の妙味を論じ苦樂昇沈の中に處する實地の工夫を示し百年の煩悶を一掃すべく下篇は觀性の妙味を説き唯心觀あり萬有一體觀死生透脱觀に及び千古の惑を破るべし眞に禪學者の良師たり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○此判禪學新論 全一冊
定價金五十錢 郵税金八錢
本書に改むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬一體論安心立命論の五章は禪學の根柢を論明して餘蘊なく以て禪學史上一新時期の扉を開くに足る最後に禪語略解を附し初學者の益に便にす。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○禪學講話 全一冊 定價金四十錢
適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨髄を鍛練したるものば禪也。痛言快語以て人生の眞意を示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書「人生の謎」以下各章、明快の説、有種の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

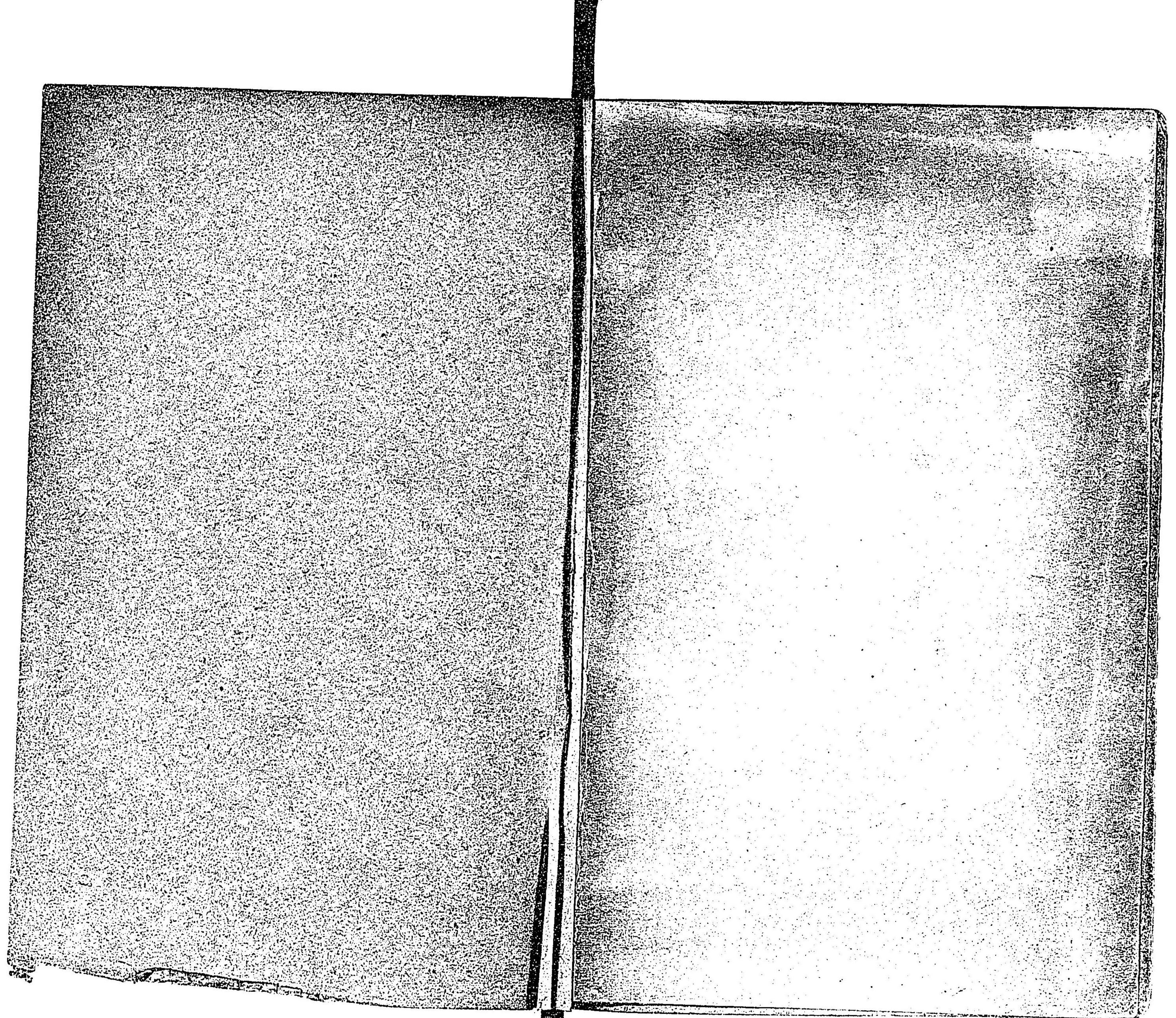
建仁寺管長 武田默雷禪師著
○默雷禪話 全一冊 定價金五十錢
切實なる活脱法あり時に無邪氣なる機鋒談あり一度本書を讀みんか禪師の發咳彷彿として紙上に活躍せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては偶善と輕薄の現代學者を罵倒し盡くし至らば無からしめ覺えず快哉を叫ばしむ。

建仁寺管長 武田默雷禪師著
○續默雷禪話 全一冊
定價金四十五錢 郵税金六錢
本書は臨濟の師家武田默雷師の談話百則を收むる是れ平話俗談の禪真なき所却て棒喝あり教訓あり修養あり讀むもの此の間に自ら禪機を拈じ來らん。

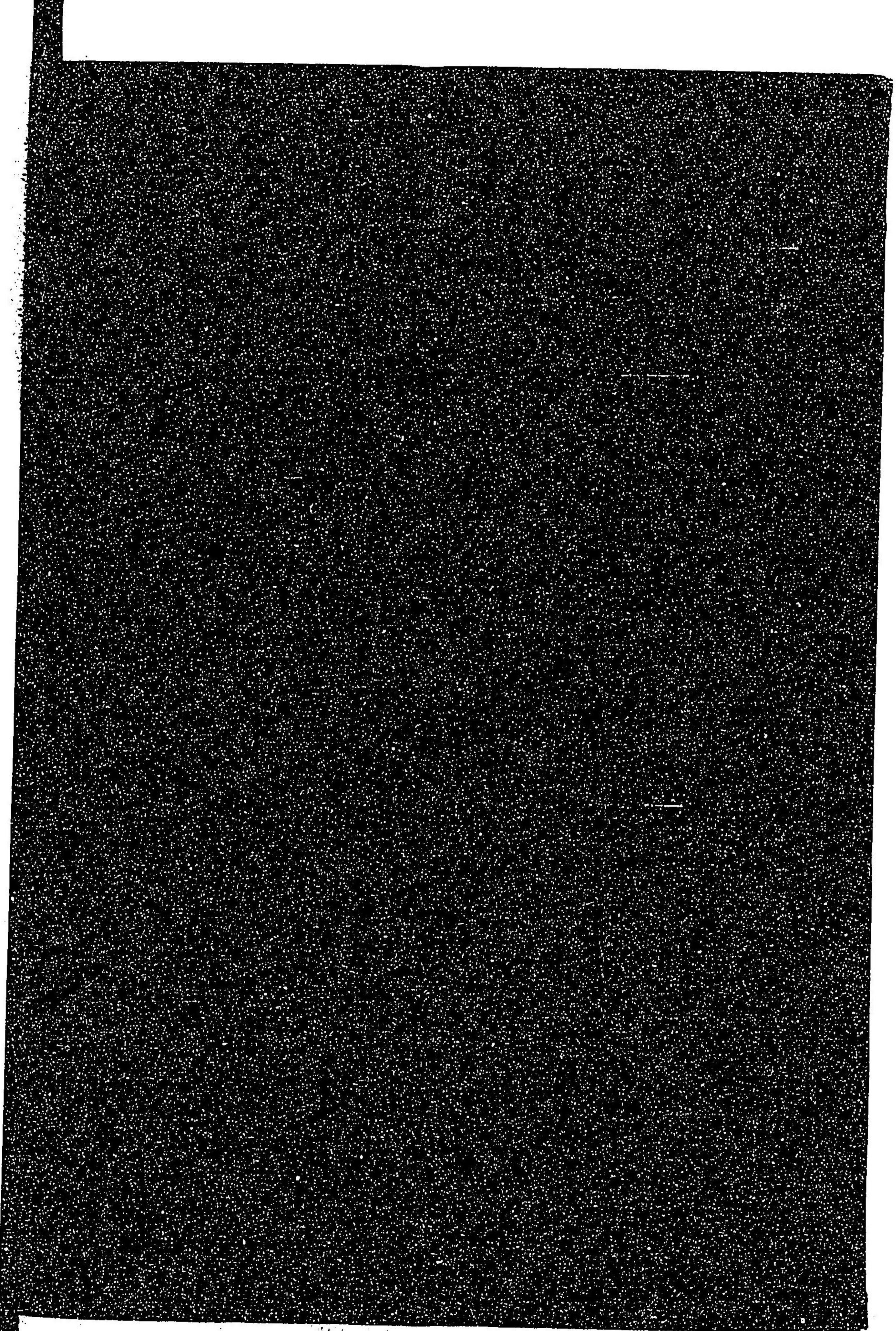
原坦山禪師著 荒木磯天講述
○禪學心性實驗錄 全一冊
定價金四十錢 郵税金六錢
本條は禪門の奇傑故坦山老師が三十有餘年の實驗に基き迷悟の本體を腦脊の二箇に歸し感病の同體を論じ腦脊の異性を道破したる者なり禪學及び生理學心理學上大革命を惹起す一書にあり。

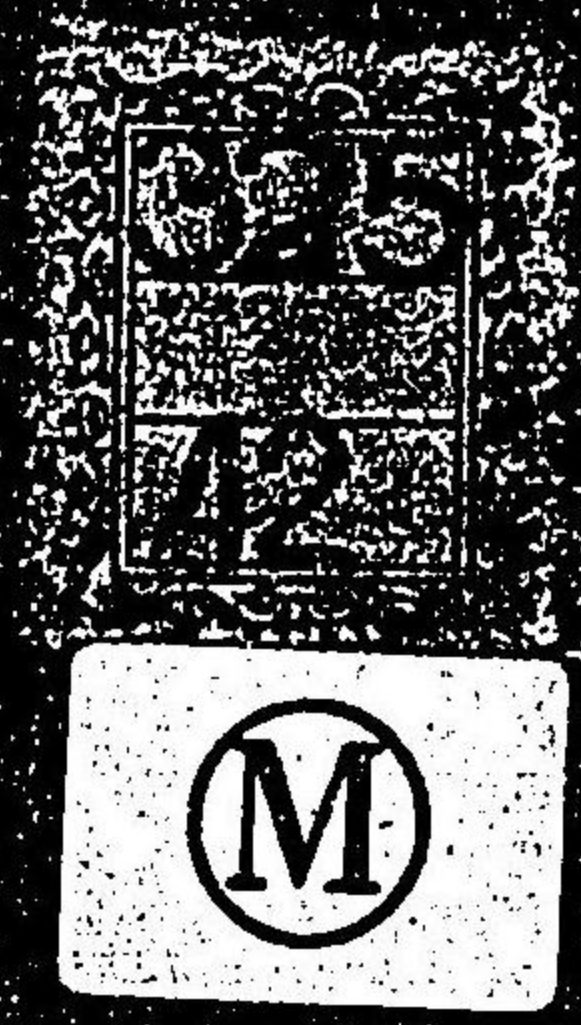
曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著
○此判禪學新論 全一冊
定價金五十錢 郵税金八錢
本書に改むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬一體論安心立命論の五章は禪學の根柢を論明して餘蘊なく以て禪學史上一新時期の扉を開くに足る最後に禪語略解を附し初學者の益に便にす。

井 列 堂 發 行 書 目



325
42





019618-000-4

325-42

禅機

竹田 默雷 / 著

M41.3

ABG-0398



